

平成 29 年 9 月 1 日

む つ み

日本国語教師の会「樺の会」

2 8 1

第五十三回日本国語教師の会「樺の会」伊豆熱川大会報告号

例年、全国行脚をしていた夏季合宿研究会（通称：全国大会）ですが、十年前から新たな実施の形として、東京近郊において、一泊二日で行うことになっています。今年は第四十七回富士山大会以来、六年ぶり五回目の静岡県での開催となりました。

第五十三回伊豆熱川大会の概要を報告いたします。地名のごとく「熱い」論議の交わされる会となりました。

第五十三回 日本国語教師の会「樺の会」伊豆熱川大会

一 主題 ことばを育て人間を育てる国語教育

—国語科における主体的・対話的で深い学びとは—

主催 日本国語教師の会「樺の会」

後援 静岡市・下田市・東伊豆町・

河津町各教育委員会

三 ところ 熱川ハイッ

〒413-0302 静岡県賀茂郡東伊豆町奈良本1240-14

TEL: 0557-23-2300 / FAX: 0557-23-1390

交通：伊豆急「熱川」駅下車 マイクロバスの送迎あり。

【宿泊】熱川ハイッ TEL: 0557-23-2300

四 日程

【第一日】八月五日（土） 熱川ハイッにて

1 受付 九：〇〇～一〇：〇〇

2 開会式 一〇：〇〇～一〇：一五

① 開会のことば

② 挨拶 大会委員長 黒田英津子 (静岡)

③ 来賓祝辞 東伊豆町教育委員会 教育長 黒田 種樹 (静岡)

④ 大会運営の連絡 大会事務局長 檜山 和人 (静岡)

二 とき 平成二十九年八月五日（土）～ 六日（日）

3 はじめの話 一〇：一五～一〇：四五

「主体的・対話的で深い学び」

伊豆熱川大会副委員長 芦川 幹弘 (静岡)

①東伊豆町で出会った二人の国語教育実践者から学ぶ

○お二人には共通点「ことばを育て、人間を育てる国語教育」

・お二人から丁寧なお返事をいただいた：謙虚なお人柄であること

ことばの力を身につけることはコミュニケーションがとれること。

：交流によって心が豊かになっていくこと。(研究主題)

②国語科学習と主体的・対話的で深い学び

・「主体的に学ぶ」：昭和三十年代から主体的な学習に取り組まれる。

学びの蓄積が必要である。

青木幹勇先生「問題をもちながら読む」

石田佐久馬先生「国語科問題作り学習のすすめ」「国語科問題作り

学習の実践」

○主体的な学習のためには、丁寧な教材研究と授業記録の活用。視

写。(書くことを重視)

○子どもたち同士で学び合うこと。：複式学級における学び合いか

らも学べるのでは。

○大村はま先生だったら、どんな単元学習を組む？

☆脈々と流れている実践を、今、どのように工夫していくことが必要かを考えていくことが大事。

【記録 小野澤由美子(東京)】

4 研究発表 一〇：四五～一二：〇〇

(1)「ねかせ読み」のススメ

—時をおいて再読する「読み」の授業の構想と実践—

お茶の水女子大学附属小学校 片山 守道(東京)

□「ねかせ読み」とは

一度学習している文章を学習材として、時間をおいて(ねかせ

て)再読し、自らの「読み」を問い直す学習である。登山に例え

ると、麓からでなく五合目辺りからのスタートとなり、一度登っ

ている(初読)ので周囲の景色を楽しむ余裕も生まれ、登頂の喜

びを味わうことができる。「読み」を熟成、更新し、読書の視野を

広げることができる。「主体的・対話的で深い学び」を生む読み方

とも言える。一晚ねかせたカレーのような味わいがあり、書くこ

とで言えば作文の推敲と似ている。

□実践(学年や教材など対象を換えて)を通して見えてきたこと

・ねかせせる期間は半年～二年程度が望ましい。(以前の「読み」を

想起するため)ねらいを焦点化して短時間で行う。

・最初の単元での学びの在り方や、説明的文章における可能性を

検討する必要がある。

・授業者側の意識の変容(ねかせて再度捉え直す余裕が生まれる。)

◇特別発言

登山の例がわかりやすい。こういう読み方もあることを小学校

で経験しておくとうい。読書生活を豊かにする。適している教材

とそうでないものを見極めがポイント。

豊泉 行男(静岡)

(2) 「卒業にむけて命を見つめる―道徳・国語を中心に―」

富士宮市立大宮小学校 望月 克哲(静岡)

□担任として毎年意識すること

・授業で勝負。

・誰もが安心できる集団作り。

・六年生にはドラマチックなゴールを用意。

□種をまく

・子どもたちと、目指す授業像を「全員理解授業」と決める。

(今も楽しい。でももっとよくしたい。)

□育てる

・命について考える道徳。

・要旨、主題からつなげる言語的な活動。(短歌ラブレター等)

□花が咲く

・道徳で地震から学ぶ。

・国語と道徳をシンクロさせる。

□種を残す

国語の学びが道徳に生きた。道徳の学びが国語に生きた。「全員

理解授業」は最高の形で結末を迎えた。

◇特別発言

豊泉 行男(静岡)

カリキュラムマネージメントの視点で学級経営がなされている。

一四七号にのぼる学級通信もすばらしい。教室の言語環境が整っており、温かな聞き手が育っている。

【記録 山田 浩子(埼玉)】

5 先達に学ぶ 一三〇〇～一四〇一

(1) 主体的に学ぶ児童の育成と音読・朗読指導 蓮沼信子(埼玉)

元教え子からの近況報告を受け、その中で、学びが生きているという実感を得ることがある。教員として生きていく上で、子ども達に足跡が残せることがとてもいいことなのではないか。

学級づくりにおいては、挨拶・返事について、子ども自身の発想をもとに改善を行い、自信をつけさせていくことが大切である。

音読・朗読の学習においては、家庭の協力を得ること、できるだけ多くの子どもに読ませること、読みの時間を十分に確保してあげること、めあてを持たせながら単位時間の中での位置づけを工夫することなどを意識すること、子どもは読むことが好きになる。また、評価に関しても、交流による相互評価、録音した自分の声を聞くことによる個人内での評価、保護者による評価など、観点を明らかにしながら行うことが大切である。このような音読指導により、子ども達の言語感覚や想像力を育成することが可能となり、また活動による達成感・充足感を与え、また主体的な学びにも結びつく。

こういった実践を通し、子ども達には、学習したことを日常生活に還元しながら、気持ちよく過ごせるようになってほしい。

(2) 教師生活を終えて伝えたいこと 藤井 恒子(京都)

最近の授業を見ると、教師から子ども達への一方通行的な授業と なっているが多いと感じる。そこで目指されるべきは、指導と評価

の一体化である。診断的評価から授業づくりが始まり、こまめな形成的評価を行い授業に反映させる。評価は、次の授業に結びつく第一歩なのである。

実際の授業づくりに際しては、一人一人の子どもをしつかりと観察し、評価をもとに単元目標を更新し続けながら授業づくりをしていくことが必要である。また、学習方法は常に教材との往復であり、本文に立ち返りながら、また学習形態についても工夫をしながら学習を進めることも重要となる。

考えることを好まない、という子ども達の現状をふまえると、「主体的な学び」は、「なぜ」を問うこと、他者と関わり合い、再び自分に戻すことで、自分がどのように変わったのか、ということを意識させることによって生まれる。

また、「対話的な学び」については、視覚化するなどして、自分の言葉のイメージが周りとの関わりによって広がっていくことを知り、自身の変化を意識させることが大切である。それらを通し、「深い学び」が実現される。そして、教師はそれらの学びをコーディネートしていかねばならない。

人間の中身は言葉でできている。だからこそ、言葉の機能を意識しながら学習者を育てていくことは、「言葉を育て、人間を育てる」ことにつながっていくのである。

自分がどう生きるべきか、子ども達が不安に思っている状況の中、自分自身を考え、自分自身を作り出せるようにしてほしい。

【記録：富岡 佑太（東京）】

6 パネルディスカッション 一四・三〇～一六・三〇

「国語科における主体的・対話的で深い学びとは」

コーディネーター 若林 寛勇（茨城）

パネリスト 岩崎 淳（東京） 帯川 理加（神奈川）

岸本 和幸（静岡）

（二）パネリストからの提案

帯川 主体的学びには、「意欲が持てる」「学習する意味が自覚できる」の二つがある。目の前の子どもたちをよく見た課題設定が大切である。さらに、目的を明確にし、身に付けさせたい力は何かを考え、子どもたちをやる気にさせる導入に繋げたい。調査報告文を書く場合には、どうしたら伝わる文になるか、子どもたちに問うてみる。子ども自身が考える導入が大事。自分の考えを基盤に、互いに高まり合う必要感と目的意識を持たせる。深い学びとは、ことばに着目して理解・表現することである。

岸本 深い学びとは、できた喜びや分かった喜びがあること。アクティブラーナーを育てることに繋がる。対話的とは、子どもの内なる主体性の発露である。ディベートなどを通して、「いかに *output* させるか」だ。型を教え、場を工夫し、主張や反論を補強する力を育てることにより、対立構造の話し合いができるようになる。他人事ではなく、自分事としての意見を持てるようにする。さらに、対立構造を相手意識に繋げていくことで、温かな聞き手を育てたい。

岩崎 主体的・対話的な学びをするために、話し合い活動や書く活動を通して、子どもの知的好奇心を刺激し伸ばしていく。

「石垣りんの詩を読む」(中学校)という学習を行った。①二編の詩を読む。②近くの子どもの意見を聞き感想を書く。③一次感想を読み、意見交換をする。感想は無記名で印刷して話し合った。これを三次感想まで行い、最後に教師の総括をした。繰り返すことで生徒の考えが深まっていった。

(一)相互の質疑応答

岩崎 岸本先生の「相手を尊重する温かい聞き手を育てる」という考えに共感した。帯川先生の「目的意識があると内容が高まる」という意見に同感である。

岸本 帯川先生の発表で、指導者の考えと子どもの考えのずれは、どう解決しているのか。岩崎先生の無記名の資料からの話し合いを真の対話に繋げるには、どのようにしたらよいか。

岩崎 グループの話し合いなど、別の話し合いも行っている。

帯川 岸本先生は、学級討論会を行うとき、どのような工夫をしているか。岩崎先生は、どのような観点で感想を選んだのか。

岩崎 発表が苦手な児童は、多く載せるよう意識した。また、繰り返し行うことで、いろいろな生徒の感想が載るよう工夫した。

(二)フロアからの質問・意見・討議(主なもの)

小仲井 対立構造を対話にするには、どうしたらよいか。

岸本 結果ではなく、筋道にこだわる話し合いをする。相手の意見を聞くことで話し合いが深まる。

山崎 主体的な学びをするためには、教師と子どもは対等でなければならぬ。

村上 感想を読んでから、話し合う時間はどのくらいか。また、他教科との繋がりについてどう考えるか。

岩崎 話し合いは十五分位行った。全員が感想を書いていた。道徳や社会・総合などで話し合いの必然性を生かしている。国語では、ことばの僅かな違いに気付く力を育てたい。資料は、話し合いに使うだけでなく、黒板に掲示して読み合った。

片山 対話的な学びの価値を子どもが分かっているとよい。

(四)今後に向けての提案

岸本 教師として、しっかり学びの価値付けをしていきたい。今日がんばった子をみんなが認め、友だちの良さに気付かせたい。温かな聞き手を育てたい。

帯川 思考のある授業にするために、教師が価値付けすることが大切。子どもの意見に立ち止まる。そのために、教材研究が大事。

岩崎 目的・目標を明確にし、out putを意識して学習する生徒を育てたい。教材研究の中から、指導研究が生まれる。

(五)まとめ

若林 学習の見通しを持つ、振り返りをしたときに、次のめあてが持てるとよい。

自問自答の学習ができる子を育てたい。友だちとの対話、作者との対話、物語の登場人物との対話などを繰り返していきたい。さらに、一往復半のコミュニケーションをめざして、子どもが前に出て説明し質疑応答をするような、子どもが主役の学習をつくりたい。

7 懇親会 一八：〇〇～二〇：〇〇 熱川ハイツにて

司会 檜山和人(静岡) 村上博之(神奈川) 横内智子(東京)

【第二日】 八月六日(日) 熱川ハイツにて

1 受付 八：三〇～九：〇〇

2 実践報告分科会 九：〇〇～二二：〇〇

◆低学年分科会

司会 小山 久仁子(埼玉)

(1) 「二年生での学習の積み重ねを生かした指導の工夫」

—学習経験を活かして自分なりの方法でまとめる—

教材：教育出版社 一年下「お手がみ」

さいたま市立日進北小学校 加藤 智子(埼玉)

① 学び方を定着させるために、自分で学習方法を選択する場を設けた。そのために、年間計画を立てて計画的に指導をした。

② 自分で選べる言語活動は一つだが、友達の活動を見たり交流したりする中で、既習を想起させて学習を深める。

③ 指導の流れ(十五時間十一時間)

④ 授業についての話し合い

・ 本時の中でインタビューを行っていたので、それを生かした言語活動があってもよかったのではないか。

・ 「もんだい」と「クイズ」の違いについて。

⑤ 成果と課題

・ 今までの学習方法を再確認することができた。年間を見通して言語活動を考えることは大切である。

⑥ 特別発言

若林 年間計画がしつかりとしている。学習ルールについて入っているのがよかった。交流の時間をもっと設けたかった。

山崎 自分なりの方法でまとめるという活動は教育の根幹である教えるのではなく、考えさせる活動を大切にして言語活動を設定する。

(2) 順序・接続詞に着目しながら説明文を読み取る

—「ぼうしのはたらき」の実践を通して—

教材：三省堂 一年下 「ぼうしのはたらき」

東伊豆町立熱川小学校 金指 はる奈(静岡)

① ぼうしの種類・働き・色や形の順番になっっていることに気付かせるために、教科書にそれぞれ違う色で線を引くことで、視覚的に理解しやすいようにした。

② 単元の最後の活動として自分のお気に入りのぼうしを紹介することで児童の学習意欲を高めた。

③ 指導の流れ(九時間)

④ 授業についての話し合い

・ 農業用のぼうしの働きが多くあり、児童が混乱してしまったのではないか。教材の吟味が必要ではないか。

・ 活動にスムーズに入れなかった。：板書の工夫、話し合い、前時の振り返りがあるとよりよい。

⑤ 成果と課題：二年生に伝えるという相手意識をもたせることで、学習意欲が高まった。

6 特別発言

若林 説明では問いを確認し、一つ一つの答えを類型化していく。見える化を意識して授業を進めていくことが重要になってくる。

山崎 児童を活動の中でもっと自由に遊ばせる。その中で、『要素』は指導するが、『パターン』は教えない。

【記録 飯塚 健太(埼玉)】

◆中学年分科会

司会者 小野澤由美子(東京)

(1) 「対話」を通して考えを深める国語科授業の創造

～新聞活用及び「書くこと」を軸にした学習活動の展開～

宇都宮市立豊郷中央小学校 堀内 多恵(栃木)

○新聞の教材性とその考察

読み手を引き付ける見出し、読み手を意識したレイアウト、限られた範囲・字数の中で重要度の価値判断をする情報選択力、簡潔で分かりやすく伝達する表現の工夫などを学ぶ手段として、また活字文化に親しみ、言語能力を育むためのメディアとして最適。教師の捉え方や見方、指示の仕方や活用法により可能性が高まり、漢字力・読解力に加え社会に目を向け始める発達段階に合わせて対応できる教材である。

○主題に迫るための手立て・各教科や教育活動との関連を踏まえた実践

① 学習指導・単元作りの工夫・・・新聞を活用した授業づくり・

書くことと読むこととの関連指導・ビブリオバトルの実践

② 学習形態の工夫

③ 言語環境作り・常時活動の工夫(書くことの日常化)

・NIE活動の推進・・・新聞スクラップ活動・スクラップスピーチ・

NIEタイム・NIEシート・NIE全体指導計画の作成及び活動・

ニュース委員会の活動・「ミニ作文」活動・読書活動の充実など

(NIEとは、新聞を教材にして、子ども達に一定の能力を育成しようとする、意図的で計画的な教育活動)

○発達段階に応じた段階的取り組み

ステージ1 新聞に親しむ(新聞で遊ぶ)

ステージ2 新聞を読む(新聞で学ぶ・考える)

ステージ3 新聞で発信する(新聞で社会とつながる)

(2) 新聞作りによることわざ・故事成語・慣用句の学び

～古きをたずねて新しき見聞を広げる～(四年)

お茶の水女子大学附小学校 廣瀬 修也(東京)

○授業の実際

① 3年生までに国語で取り組んだ言語活動の振り返り

② ことわざ・故事成語・慣用句の定義

③ 新聞の作り方の確認

④ ことわざ・故事成語・慣用句の中から一種類を選び調べる。

⑤ 調べたことを新聞にまとめる。

⑥ 新聞の読み合い、感想の交流 ⑦学習の振り返り

○成果と課題

・学習用語の定義を示したことが効果的。司書教諭の協力による豊富な資料集め。新聞を交流する時間の設定は互いの刺激になった。

・「語源」という言葉の投げかけについて。新聞の必須項目として挙

げた「自分だったらどう使うか」に児童が苦戦。無理なく日常に生かせる手立てはないか。

◇特別発言から 安田 恭子（東京）・秋山 誠（東京）

「集める・調べる・まとめる」活動をさせるに当たり、テーマ（視点）を持たせることが必要。最後にそれに対する自分の意見を出させる。それが本当の学習の振り返り活動。調べたことを表現させる方法は多様。新聞は多様な表現に対応できるのでよい。

【記録 水垂 弘枝（埼玉）】

◆高学年分科会

司会者 小池 学（埼玉）

（１）読むことと書くことを結びつけた意見文の指導

～言語活動の場を絞り込み、言語能力を育成する～

教材：「文章構成の効果を考える」（学校図書六年上）

下田市立朝日小学校 高橋 綾子（静岡）

○提案の趣旨：国語の学習に対する目的や学びの実感を欠いた子どもたちが、「書きたい」という意欲を持ち、論理的な文章を書く力を身に付けることができることを目指した。単元の特徴の一点目は意見文のテーマ設定にあり、「修学旅行の班別研修中の食べ歩きのは非」とすることで、自らの体験をもとに意見を持ちやすいうえに、校長先生や五年生に伝えたいという必要性を感じることができた。特徴の二点目は、教材文を用いて頭括型・尾括型・双括型という基本の型とその効果について学び、構成に対する意識を持たせたことである。三点目は、双括型の文章を書くための具体的な手立てにあ

り、はじめと終わりの意見およびそれらの根拠となる事実を短冊に書いて並べ替えをするという操作活動を取り入れることで、書くのが苦手な子ども、自力で論理的な文章を組み立てる達成感を味わえた。

○論点①実践の成功ポイント：「このような力をつけたい」という単元全体の見通しと、「今日達成したいこと」という本時を見通す目が教師の側に備わっていた。

○論点②型と個性：型の重視によって全員が形の整った文章を書けた一方で、能力差や内容の違いが出なかったことについては、自分の意見を構築するところまでチャレンジさせたいという意見と、今回は「みんなができる」ところまでよく、大切なのは小単元の積み重ねであるという意見が出た。

（２）自分たちで選んだ絵をプレゼントしよう

～絵から読みとったことを、表現を工夫して書く～

教材：『鳥獣戯画』を読む（光村図書六年）

横須賀市立根岸小学校 平田沙也香（神奈川）

○提案の趣旨：教材文である「鳥獣戯画」の鑑賞文から筆者の「目の付け所」（絵を鑑賞する観点）や表現の工夫を読み取り、「鳥獣戯画」の鑑賞文および自分を分が選んだ絵の鑑賞文を書くことに活かすことで、ものの方や表現の幅を広げることが目指した。単元の特徴の一点目は、教材文から筆者の「目の付け所」を発見したり、表現の工夫の効果を考えたりすることで、形式を教え込むのではなく、それらの意味を実感しながら自発的に「技」を活用する姿が見られ

たことである。二点目は、交流を取り入れた推敲である。良い点はピンクの付箋、改善点は青の付箋、自分の読みとの比較は緑の付箋に書いて原稿に張り付けるといふ活動を通して、互いの文章を参考にしたり、表現について話し合ったりしながら推敲した。

○論点①手厚いモデル文の功罪…教師が書いたモデル文を真似することで「書けた気」にはなれるが個性は出にくいという問題点の指摘と、感じたことを言語化するための語彙を広げるために役に立つという意見があった。

○論点②教師の役割…深める、視点を絞るなど、鑑賞文の交流時における教師の支援が不可欠な活動である。そのためには一時間の流れは単純な方がよい。

◇特別発言 濱田芳子（神奈川） 黒田英津子（静岡）

【記録…小入羽さや子（東京）】

2 記念写真 一三〇〇〜一三〇一五 全体会場にて

3 ゲストの話（記念講演） 一三〇一五〜一三〇二〇〇

講師 和歌山 静子（挿絵画家・絵本作家）

『絵本は一生の友だち』

・一九四〇年京都生まれ、幼少期は函館で過ごす。

・昭和二十一年小学校入学 敗戦から一年

ペンテル十二色のクレヨンをプレゼントしてもらった。嬉しくて、絵を描きたくなり、絵描きになりたいと思うようになった。絵描きの学校に行くことを決め、父に話しても反対されるが、武蔵野美術大

学へ通うこととなった。

・さまざまな出会いから

「暮らしの手帖」

父が購読してくれていたことから、花森安治氏の思想に触れる。戦争終了時の写真を見るたびに涙が出ていた。戦争時代の大変な子どもたち生活や残された子どもたちの暮らしを伝えていきたいと思うようになる。

「世界少年・少女文学」

近所のお姉さんが物語を読んできた。多くの物語に触れたことをきっかけに、自ら絵の塾に通うようになった。

大学卒業後、デザイン会社に就職。しかし、デザイン会社を辞め、事務職につくこととなる。二十六歳で寺村輝夫さんと出会い、絵本の仕事を手がけるようになった。一九六七年には「王さまばんざい」が出版され、「王さま」シリーズは約四〇冊出版されている。会話、空間の大切さなどを学びながら作品を描き続けた。

四十二歳になり、息子を出産。息子が生まれたことは、絵本の仕事に大きな転機を与えてくれた。息子が四年生になったころ「ぼくのはなし」を描いた。当時は日本の小学生向けの性教育の本がなかったため、息子の一言がヒントになり、高校の国語教師である山本先生監修のもと、「ぼくのはなし」が作成された。十五・六歳になつて突然話すのは誰でも恥ずかしいこと。小さいときに話しておくことでそのときにつながる。

函館に墓参りに行っているが、函館に向かう列車の中は、二十歳

過ぎた息子とゆつくり話ができる時間であった。いじめや難病と向き合った息子が「つらいことがあったときに、本屋さんでおふくろの絵本を見ると落ち着く」と言った。今では孫を見ることができずごくよかった。

数々の出会いの中で絵本が生まれ、自分の子どもにたくさん絵本を読み聞かせてきた。絵本には、やすらぎや楽しさ、元気をもらっている。本の中に隠れていることをたくさん見逃していた。もう一度絵本と向き合っていきたい。地球も世界も大変な時代ではあるが、これからも今を楽しみたい。【記録 三富 法子（神奈川県）】

4 まとめの話（総括講演） 一五〇一五〇一五〇四五

松木 正子（東京）

「国語科における主体的・対話的で深い学びとは」

○改訂のポイントは…

・「言語活動」が本文に入ったこと。言語は使うことによって習得し、身につく、という考え。使うことが大事。話し合う力は、国語科で。「話し合い」を教材化して身につけなければいけない。

○古典の指導を大事に。

日本古来の文化について触れましょう、ということ。

・ことわざの学習が三年生に。中学年でも身近に古典を。

・NPO「結びの会」を活用。

○「何のために学ぶのか」

・目的意識をもたせることが大事。

・今していることが、何のためなのか、どんな力につながるのかを子どもがわかっていることが、学びに向かう力となる。

○学校は「人間性」を育てるところ。ことばを育てることが、人間を育てること。身につけることは、生きる力。

・「授業は、子どもが自ら学ぶ時間である」教師は、子どもとともに、子どもの思考に寄り添って。「子どもと対等であり、自由である」ことが主体性を生む。

○「問題作り学習」は、指導法というだけでなく、子どもの学習法である。他にも応用できる。自分で学んでいけること。みんなと学んでいくこと。

○教師の仕事

・三つの「や」：やる気、やり方を知っているか、やった！

・教材研究：①ねばならないこと ②この教材だからできること

④ したいこと。

・授業は、楽しい時間であること。

5 閉会式 一五〇四五〇

【記録 小野澤由美子（東京）】

・会代表の挨拶

・参加者代表の挨拶

・本部事務局からの連絡

・閉会のことば

山崎 和男（千葉）

谷 哲也（静岡）

若林 富男（茨城）

黒田英津子（静岡）

6 交流の集い 一六〇三〇〇

地元の寿司屋にて